

慢性腎臓病

末期腎不全の治療と慢性腎臓病対策

末期腎不全の治療

慢性腎臓病（CKD）とは腎臓の働き（糸球体濾過値）が健康な人の60%以下に低下した状態や蛋白尿が出るといった腎臓の異常が続く状態をいいます。CKDがさらに進行し、腎臓の働きが15%以下に低下した状態を末期腎不全（CKD5期）といって透析療法が必要となります。一般に知られている透析とは正確には血液透析といい、週3回通院してダイアライザーという濾過器で4時間程度、尿毒素や余分な水分の除去を行います。日本ではまだ少ないのですが腹膜透析という在宅治療も行われています。

腎臓移植

さらに根治的な腎不全の治療として腎臓移植があります。これは親族から片方の腎臓をもらう生体腎移植と、亡くなられた方からもらう献腎移植というふたつの方法があります。腎臓の働く間は免疫抑制剤を飲まなければなりません。最近では腎臓の生着率が10年で80%程度と格段に良くなっています。

早期のCKD対策

慢性腎臓病は静かな病気であり、症状が出てくるのは30%以下のCKD4期になってからです。しかし、この時期から腎臓の働きを回復することは難しく、末期腎不全まで進んでしまうことが多く見られます。検診や人間ドックでの検尿異常（尿蛋白や尿潜血）または血清クレアチニンの上昇などを指摘された場合には早期にかかりつけ医または腎臓専門医を受診し、CKDの病期を進行させないことが大切です。

済生会八幡総合病院

腎センター 部長

医学博士 安永親生